

提出日： 令和 3 年 3 月 3 日

所 属： 獣医 学部 動物応用科学科

氏 名： 和久井信 職位： 准教授

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

私の学問的バックグラウンドである基礎医科学・毒性学分野では、実践的持続可能な・という言葉がキーワードとなっています。これは、実践社会のなかにおいて、色々な考えを持つ学生がそれぞれの持っている個性を大事にして、地道に目標に向かっていくことに対して、真摯に実践的に継続してかかわっていくことが重要であるからです。動物病態学では、一般社会で日常的に使用させている病理病態学用語の学問的定義と真意を基礎医歯薬獣医科学の基本として学習する。本科目を学習することは一般社会で使用されている医学用語？が、いかに誤って使用されているかも常識教養として習得します。毒性学では、一般社会で日常的に行われている安全性試験・基礎医歯薬獣医科学・科学を学習するだけではなく、毒性学の必要性から現状について科学総合を理解し、社会で毒性学の指導者になるように学習する。実社会で毒性試験を実践している毒性学技術者の多くは、毒性学試験の真の目的を理解していないのが現状といえます。毒性学の実習では、一般社会で毎日行われている安全性試験・科学を実体験するだけでなく、安全性試験・科学の理論的背景を他の技術者に説明講義できるように学習する。大学院で履修する比較毒性学特論Ⅰ・Ⅱ、環境毒性学特論、実験腫瘍学特論、動物生命科学特別演習Ⅳ-I、動物生命科学特別研究Ⅳ-I、動物生命科学特別演習Ⅳ-II、動物生命科学特別研究Ⅳ-Iでは、社会で活躍するうえで重要な知識を習得することで学位をもつものとして、社会で指導できるように学習する。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
動物病態学	動物応用科学科	必	2	140
毒性学	動物応用科学科	選	3	40
毒性学-機器分析実習	動物応用科学科	選	3	40
比較毒性学特論Ⅰ	動物応用科学専攻	必	1~2	2
比較毒性学特論Ⅱ	動物応用科学専攻	必	1~2	2
環境毒性学特論	動物応用科学専攻	必	1~2	2
実験腫瘍学特論	動物応用科学専攻	必	1~2	2
動物生命科学特別演習Ⅳ-I	動物応用科学専攻	必	1~2	2
動物生命科学特別研究Ⅳ-I	動物応用科学専攻	必	1~2	2
動物生命科学特別演習Ⅳ-II	動物応用科学専攻	必	1~2	2

動物生命科学特別研究 IV-I	動物応用科学専攻	必		2

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

私の教育理念は実践毒性学・病態学の具現化であります。それは、実践社会のなかにおいて、色々な考えを持つ学生がそれぞれの持っている個性を大事にして、少しずつでも、地道に目標に向かっていくことに対して、教員として真摯に実践的に継続してかかわっていくことが重要であるからです。動物病態学、毒性学、毒性学の実習を学習することで、一般社会で毎日行われている安全性試験・科学を実体験するだけでなく、安全性試験・科学の理論的背景に社会で毒性学の指導者になるように教授・学習する。大学院で履修する比較毒性学特論Ⅰ・Ⅱ、環境毒性学特論、実験腫瘍学特論、動物生命科学特別演習Ⅳ-I、動物生命科学特別研究Ⅳ-I、動物生命科学特別演習Ⅳ-II、動物生命科学特別研究Ⅳ-Iでは、社会で指導者として活躍できるように学習する。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

人間尊重を基本理念に、よりよい人間関係と科学の探求・実現、並びに文化とヒトと動物の健康を大切にする社会の建設に貢献する人材を輩出することを目的に教育している。基本理念であるヒトと動物を介しての人間尊重を理解し、基礎医科学・毒性学分野に関する専門的知識・技能の備え、動物応用科学の分野で実践的に活躍できるジェネラリストを養成するため、学生のジェネラリストとしての専門知識獲得を目的とした教育の実践を目指している。このジェネラリストを構成する多くの能力のうち、私の担当教科で最も重視されるのは、実践力である。特に生命科学の主流である分子生物学的毒性学関連の教育では、日々進歩する研究内容からジェネラリストとして必要な情報を読み取り、また生涯に渡って生命に関心を抱き、学び続ける態度を養うように導きたいと考えています。また、選任教員として、学生をいかに進学・卒業に向かってモチベーションを保持させるかという命題に対峙している現状から、学習効果を得るためにジェネラリスト教育に根刺した細やかな教育指導を、講義、実習、研究室内教育指導を行いたいと考えています。さらに、外国人留学生を参画させての学習支援活動もくわえ、国際的な教育の向上を教育理念に加えたいと考えています。

アクティブラーニングについての取組

一方的な教育からの脱却し、双方向教育を行うことを考えています。しかし、現在の教育内容時間を維持しながら、双方向教育時間をいかに取るかが一番の問題ですが、少しずつ実践していきたいと考えています。

ICT の教育への活用

インターネットを用いた教育は、効率的な点が多くあることがわかりました。しかし、学生の学問的モチベーションの維持には、現状では対面式の方が効果が高いので、これを打破すべき方法を模索しています。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

① 教育（授業、実習）の創意工夫 B

教育へのアクティブラーニングの導入初めているが、時間の分配を打開する問題点である。

② 学生の理解度の把握 B

教育者として学生の理解度は A と考えているが、より向上する必要性も考えることから B として考えている。

③ 学生の自学自習を促すための工夫 B

講義で学習した内容に自学自習をもとめ課題を出しているが、研究室ゼミでの学生の自学自習と比較すると、講義での自学自習の足りない部分が明白であるので B とした。

④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)B

学生からの質問には丁寧に解説しているが、研究室ゼミでの討論と比較してまだ、講義学生の質問の質のレベルの低さが問題と考え B をつけた。

⑤ 双方向授業への工夫 B

双方向教育を目指しているが、研究室ゼミと比較して、不十分として B とした。

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

本年度はオンデマンド講義のため、過去なかった評価ができました。言葉は違いますが、前期・前期で講義の課題が簡単すぎる。前期・後期での評価では、課題が難しいとの評価でした。対面講義で無いので学生の理科度は計り知れないところがあり、本年度の講義評価が、あくまでも緊急事態時の講義に対するものであると考えられます。

② ①の結果はどうでしたか。

前期・後期での評価では、課題が難しいとの評価でした。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

本年度の講義評価が、あくまでも緊急事態時の講義に対するものであると考えます。

6. 学生の学修成果

<p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u> <u>実践薬害もんだい、環境汚染物質の動物への影響について、講義にいれているが、オンデマンドのためか、学生の反応は低い</u></p> <p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価 前期・毒性学の講義に対し、少数の学生からわかりやすかったとの評価をうけた。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>できるだけ、参加したいが、学生指導時間と競合するため欠席することがおおい、しかし、オンデマンドになってからは、学生も参加できることから参加率が向上した。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>短期的な教育活動に関する今後の目標としては、実践的教育により力をいれて、社会に出た後で学生が、他大学出身の学生よりも秀でた人材となるように教育していきたい。</p> <p>長期的な目標は担当学科目の存続と教育者の後継者指導を行っていきたい。</p>
<p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p>